

ナナカマドの実に聖なるものを受取る人
木村淳子第二詩集『美しいもの』に寄せて

鈴木比佐雄

1

木村淳子さんは、冬の北海道の厳しい自然の中で耳を澄ませて、春の到来を予感することを大切にしてきた詩人だ。冬を辛抱強く耐える時間があるからこそ、春という命の甦る季節への憧れが詩行に溢れ出てくるのだろう。木村さんの詩には、春への憧れと同時に命を育む時間として冬を慈しんでいるような命への深い祈りを感じることができる。第一詩集『そよとも風の吹かぬ日には』の中の同名のタイトル詩を引用してみる。

そよとも風の吹かぬ日には

そよとも風の吹かぬ日には

枯れ葦の、

時には白い腹みせて

魚の浮かぶ、

川面を見つめて佇つていよう

じつと佇ちつくすことで

時間をやり過し、

かすかな水底の動きに

目を凝らして

川面に移ろう影を

追おう

やがて

枯れ葦をそよがせて風が立ち、

淀んだ水路にさざ波が立ち、

白い腹みせて浮ぶ

魚が、

かすかに向きを変えながら
絡みつく水草をほどいて
流れて行く時、

影の中から立ち昇る光が

凍えた想いを融かして、

ひととき

浮び上がる優しい世界を

私のものにしてくれるかも

知れぬから

2

いだして「浮かび上がる優しい世界を／私のものにしてくれるかも／知れぬから」と希望を差し出してくれる。移ろいゆく世界の中で何が大切かを木村さんは、静かに物語っているように思われる。奇をてらう派手な詩ではなく、目立たない地味な存在を見つめて、正攻法で内面に真直ぐに語りかけてくるのが木村さんの詩法なのだ。晩秋の中に冬を飛び越えて春の光を感じているような「優しい世界」を開示してくれている。

この詩の情景は、晩秋の冬に向かう川辺でみた魚が白い腹をみせて泳ぐさまが記されているだけだ。しかしこの詩の背後から描写の中に深い祈りや精神性が予感されてくる。例えば「影の中から立ち昇る光が／凍えた想いを融かして、」などの詩行には、荒涼とした情景の中にも、光明を見

木村さんの名前を初めて耳にしたのは、二〇〇七年に刊行された『原爆詩一八一人集』英語版を翻訳する際の訳者候補の一人として名前が挙がった時だった。一度は引き受けてもらえることになつてはいたが、仕事などの関係で最終的に辞退された。『原爆詩一八一人集』日本語版は八月六日

に刊行されたが、そのすぐ後に木村さんが翻訳し

た『ロツテ・クラマー詩選集』（土曜美術社出版販売）が刊行されて本人から贈られてきた。ロツテ・クラマーの両親は、ナチスに虐殺されたユダヤ人だ。彼女はユダヤ人たちが子供たちを守ろうとした児童救援船によってイギリスに送られた一万人の子供の一人で、当時十五歳だった。後書きによるとドイツ語を母国語とするが後にイギリスの高名な詩人となるロツテ・クラマーの詩集を、木村さんは偶然にロンドンのピカデリー・サーカスの大きな書店で見かけたという。その詩集に感動し、手紙を書いてロツテ・クラマーと交流が開始されて翻訳詩集が実現したそうだ。その翻訳詩集の二番目に置かれている詩「最終的な解決」を引用してみる。

最終的な解決　　ロツテ・クラマー

木村淳子／

ドロシー・デュフル共訳

先ほどから彼らは雑草を刈っている

小道のカモミールは

黒いアスファルトの下に埋められてしまった

あの香りは母がせんじてくれた

痛み止めのお茶を

思い出させてくれたのに

草を刈って　小道の雑草の

息の根をとめてしまった　あの人たちは

花の姿に気づかなかつたのだろうか

痛みを抑える薬草を知らなかつたのだろうか

よく磨かれた電話機で

虐殺を命令したあの人たち――

互いを石のように無視しあう時代には

それはいとも容易なことだったのだろうか

ロツテ・クラマーの詩は平明でありながら、しかもナチスの行ったユダヤ人大量虐殺に対する深い根本的な問いを秘めて提示されている。木村さんはその詩の魅力を発見し、日本に広めようと願ったのだろう。どうして一人ひとりでは善良な人間たちが、大量虐殺をいとも簡単に命令できたのか。その人間の奥底に潜む非情さや残酷さを直視し探るために、ロツテ・クラマーは小道の雑草である「カモミール」の存在を例にとり、人間が他の生きものの命を軽視する感受性と切り離せないことを告げている。また人間の感受性が野草とはいえ固有の名を持つ生物の多様性を認めない行動をとることの精神の荒廃を指摘している。人間

が生きるものに序列を付けて恣意的な価値判断を絶対化することは、結果として人間社会においても人種や国籍で他者を差別することになり、その果てに大量虐殺が生れる下地があると語っているように私には思われる。木村さんがなぜドイツ系のイギリス人の翻訳をしたかを想像するなら、ロツテ・クラマーがナチスの行為を告白することだけでなく、人類的な立場で大量虐殺の意味を日常的な場所から問い続けていることを高く評価したからだろう。またロツテ・クラマーの静かな声である言葉遣いが、木村さん自身とも共通性を持っていたからかも知れない。

3

木村さんは二〇〇三年に英語詩集『IN THE WIND』を刊行している。三行詩の英語詩集であり、日本語訳でもある俳句が後ろに添えられ

ている。Ⅲ章に分けられてるが、Ⅰ章「SNOWY DAYS」は十三篇、Ⅱ章「IN THE WIND」は二十三篇、Ⅲ章「FLOWER IS GONE」は十篇の計五十六篇が掲載されている。英詩と日本語俳句は基底では繋がっているが、表現上では異なる別の作品である。むしろ英語と日本語の差異を際立たせ、二つの言語の相乗効果によって木村さんの詩的精神をより立体的に明らかにさせる効果があるように思われる。各章から二篇ずつを引用してみよう。

Ⅰ章「SNOWY DAYS」

Red berries
of mountain ash shining
celebration of Epiphany

ナナカマド赤く輝き公現祝う

Accumulating sorrows
snow falls
darkness deepens

哀しみを重ねて雪のふりつもる

Ⅱ章「IN THE WIND」

Spring wind
gently touches the pinwheel
in a child's hand

幼子の手のかげゆるままわす風

Clouds floating
horses romping
breezy green shining

雲流れ馬戯れて緑の野

Ⅲ章「FLOWER IS GONE」

Darkness deepens
in the tiny garden
a flower falls

花一輪落ちて深まる庭の闇

Pondering over your whereabouts
picking a flower
in the shadowy garden

このびじつ日陰の庭に花を摘む

Ⅰ章の二篇冒頭の詩に出てくるナナカマドの赤い実の輝きを見て、木村さんはキリスト生誕の際に東方の三博士が訪ねてきた公現日（一月六日）を祝福していると感じている。木村さん

はクリスチャンではあるが、詩を読む限り宗派にあまり捉われないことなく、白銀の世界の中でナナカマドの赤い実の輝きの中に聖なる存在を感じて敬虔に生きてこられたのだろう。次の「哀しみを重ねて」で始まる詩篇も雪の白と暗闇の黒を対比させて、世界の深まる瞬間を切り取っている。木村さんの英語には、神という言葉はどこには出てこないが、神という聖なる存在が近くに住んでいる気がする。日本語の俳句には、神というよりも森羅万象の自然神のような存在が宿っているような気がする。同じ詩的精神でありながら二つの言語によって差異が生まれてくることはとても興味深い。

Ⅱ章の二篇の子どもの手にある「かざぐるま」をまわす春の風や、風の緑などの大気が移動することに木村さんは聖なるものの息吹のようなものを心底から感じているようだ。子どもとは亡く

なった幼少の頃の妹さんを想起しているのかも知れないが、聖なるものが春の風を吹かせてかざぐるまを回すイメージは、新詩集のⅡ章の妹への鎮魂詩に繋がっていったのだろう。

Ⅲ章の二篇では、花を摘み花を添える行為の中に、死んでしまった存在や姿を見ることの出来ない神の存在を強く感じさせてくれる。そして捧げられた花ばなを見るために、暗闇や日陰の中に愛する存在が隠れていることを予感している。それらの死者や聖なる存在と豊かな対話をきくと試みた結果がこの英語詩集になったのだろうと考えられる。その意味ではこの英文詩集は天と地、夏と冬、白と黒など両極端の世界の間に、神々しいものを発見してしまう自らの詩精神を確認するための痕跡だったのだろう。

4

三月 弥生の空は
その深みに水を湛えて
縛めを解かれた
さかなたちを泳がせる

祭りの雛を
水に流すと
女たちの空は晴れ上がる
いつとき 思いの中で春が生まれ

春の中で
思いは 自在に泳ぎ回る
さかな

雪の 晴れ間の

新詩集『美しいもの』は一章「春の靴」十四篇、二章「月 妹に」十篇、三章「美しいもの」十篇などの計三十四篇から成り立っている。一章の冒頭の詩「晴れ間」は木村さんの冬の終わりから春にかけての季節感を最も鮮烈に記した詩篇だった。

晴れ間

雪があがって
灰色の空のさげ目から
のぞく 空の青みが
力を増してくる

心もとなげだった一月の空は
はにかみながらも

自己主張する 二月半ばの色に変わり
女たちは 祭りの雛に心を寄せる

木村さんはきつとこの詩「晴れ間」を、冬の曇天の中に垣間見た「空の青み」から発想したのだろう。季節を先取りし、その春への憧れがこの詩を成立させているのだろう。「はにかみながら」の一月の空、「祭りの雛に心を寄せる」二月半ばの空、「縛めを解かれた」空の展開は、繊細な感受性の連なりだ。冬が厳しい北海道の風土だからこそ、現代では失われつつある季節の訪れへの感謝の心を宿した詩行が生み出されたのかも知れない。最後の一行「雪の 晴れ間の」がそのことを物語っている。また昔から過酷な冬を乗り切つて桃の節句を迎えてきた女たちへの共感が詩行に溢れでている。一章は冬の終わりから春へ、夏から晩秋へと季節が小刻みに進行していく。詩「春の靴」は「春の靴があるっていく」という一行から始まり、街を歩く靴が植え込みの緑などの春を発見する喜びを記したユニークな詩だ。その

他の詩も物を通して季節と対話をしている、みずみずしい生活感が詩に昇華されている詩群だ。

二章「月 妹に」は、亡くなった妹を街中で幻視する詩篇が多く配列されている。詩「月 妹に」の一連目「月が 出ている／人ごみのなかから／妹の 白い顔があらわれる／地下鉄の駅」を讀むと、生きることに苦悩した妹への木村さんの思いは、深層の中に刻み込まれていて無意識の内に現れてくるようだ。木村さんは幼い頃に妹とした難遊びなどを回想しながら、今この世にあることの意味を問い続けているのかも知れない。妹への鎮魂の思いが木村さんの求め続ける聖なるものへの憧れに続いていったようにも感じられる詩篇群だ。

三章の「美しいもの」は、英文学者である木村さんがヨーロッパ、カナダなどに旅をして出会った人びとを記した詩篇や、アウシュヴィッツ、長

崎、アフガンなどの悲劇を受けとめて、世界の苦悩を抱え込んだ硬質な詩篇が並んでいる。三章冒頭の詩「ヨーロッパに行ったことがありますか」は、ロッセ・クラマーを訪ねた時に交わした会話の意味を回想して書かれた詩だ。最後に新詩集『美しいもの』の同名のタイトル詩を引用したい。季節の美しさを描写しながらも「いちばん美しいのは／槍で突かれて血を流すところ／流れ出る血のしずくは／初冬の空に紅いナナカマドの実となり／私たちを高みへと引き上げてくれるだろう。」と語っている。英語詩のナナカマドと呼応するように、木村さんの中で「血を流すところ」とナナカマドの実は一体となり詩を書き生きる原動力となつているのだろう。季節感を大切し、聖なるものを内に秘めた多くの人たちに読んで欲しいと願っている。

美しいもの

花びらの間に 露の珠を宿して
開き初めた 六月の紅い薔薇

鳩羽色の空の下 静かに
色を深める 紫陽花の青

美しいものはまだまだあるが
いちばん美しいのは

槍で突かれて血を流すところ
流れ出る血のしずくは

初冬の空に紅いナナカマドの実となり
私たちを高みへと引き上げてくれるだろう。

黒い鳥の影が地を覆い
日暮れは早くなり
降り止まぬ大雨に大地は浸されて
すべてが押し流されてしまったが

私の心を占めるのは
あなたが約束された調和の国。

やがて秋草がそよぎながら
優しい花を咲かせる野原。

夏もまたというのに灼熱の陽に焼かれ
秋も来ぬというのに
ふいにされた穫り入れの

畑の入り口に立って思い巡らしている。

木村淳子詩集『美しいもの』栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2011